(90)

氏名(生年月日)	唐澤久美子（カラサワ クミコ）
本　　籍	
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第1436号
学位授与の日付	平成6年2月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**声門癌に対する一日二回照射法の臨床的検討**
論文審査委員	（主査）教授　重田　帝子
	（副査）教授　石井　哲夫，澤口　彰子

論文内容の要旨

目的

放射線治療による正常組織の障害を可能な限り減少させ，かつ腫瘍の局所制御を高める目的で，声門癌T2症例を対象に1日2回の多分割照射法を行い，従来の照射法と比較検討した．

対象および方法

1986年4月から1992年12月までに声門扁平上皮癌T2N0M0の42例を対象として1日2回照射法を施行した．T2の亜分類は，声帯の可動性が正常なT2aが32例，制限されているT2bが10例であった．朝・夕の照射間隔は6時間以上とし，1回1.5Gy，1日3Gy，週10回法で，総線量66～72Gyを5～8週で照射した．ただし急性反応軽減のため36Gyで7日間休止することを原則とした．有効性の比較対照群55例（T2a：38例，T2b：17例）は，歴史的対照群として1966年1月から1992年12月までに1回1回1.8～2.0Gy，週5回の通常の照射法で，総線量55～72Gyを6～10週で治療した．正常粘膜反応すなわち安全性の対照群は，1日2回照射法施行と同時期に治療したT1症例（51例）で，粘膜反応は早期，晩期ともスコア化し定量的に評価した．

結果

T2症例における両群間において，全例腫瘍は一次制御された．再発はいずれも局所再発で，5年累積局所制御率は1日2回照射群が75.6%（T2a：74.5%，T2b：80.0%），対照群が73.2%（T2a：84.8%，T2b：60.0%）であった．原病死は，再発に対し適切な治療が行われなかった症例のみに認められた．また，急性反応は1日2回照射群が対照群に比べやや強い傾向を示したが，有意差は認めなかった．晩期反応は最長70カ月の観察で，1日2回照射群の5例に乾燥化を認めたが重篤な晩期反応は認められず，これも対照群との有意差は認めなかった．

考察

安全性は1日2回照射群と対照群とに有意差はなく，治療成績も，我々の症例では差がなかった．しかしT2症例のうち，より進行例で有用である傾向が示唆された．これらの結果からは，直ちに1日2回照射法が有効であるとはいえないが，諸家の報告から安全性が同等であれば症例を増やし長期観察により，より進行例において良好な成績が得られると予測される．なお，初期の症例では総線量を増量させていないことや，歴史的対照群であることなどが今後の研究課題と考えられた．これらのことから，現在全国に呼びかけて多施設間による無作為比較対照研究を1990年から実施しておりその結果を期待したい．

結語

声門癌T2症例に対する1日2回照射法は，歴史的対照群による従来の1日1回照射法と比較し，正常組織の急性および晩発障害に有意差を認めず，一次効果，遠隔成績にも差を認めなかった．より進行癌においては有効性が示唆された．これらの結果から研究精度を上げるため，更に多施設による無作為比較対照研究の必要性を認めた．

論 文 審 査 の 要 旨

早期声門癌に対し機能温存に有利な放射線療法は第一選択であるが，従来の一日一回照射法による治療成績は必ずしも満足されるものではなかった．

本研究は，II期の声門癌に対し，一日二回の多分割照射法を施行し，その一次効果，安全性，遠隔成績などについて比較検討したものである．

多分割照射法の一次効果，遠隔成績では両者に大きな差を認めなかったが，安全性では高線量が照射されたにもかかわらず晩期正常組織反応の増強は認められず，したがって晩期正常組織反応を一定にすることによって，特に声帯の可動性が制限されている進行例では有効性のある照射法であることが示唆された．臨床上，学術上価値ある論文である．

主論文公表誌

声門癌に対する一日二回照射法の臨床的検討
東京女子医科大学雑誌　第63巻　第12号　1500-1509頁（平成5年12月25日発行）唐澤久美子

副論文公表誌

1) 放射線とBRM—その臨床的展望—．Biotherapy　4(7)：1241-1245(1990)大川智彦，喜多みどり，田中真喜子，唐澤久美子
2) 低線量上半身照射による腫瘍制御に関する基礎的臨床的研究．日医放線会物理会誌　3(1)：24-27(1990)大川智彦，唐澤久美子，磯部まどか，塩浦宏樹，兼安祐子，田中真喜子，喜多みどり，坂本澄彦
3) QOLからみた癌治療—根治的放射線治療を中心に．Karkinos　4(5)：535-538(1991)大川智彦，喜多みどり，田中真喜子，兼安祐子，唐澤久美子，磯部まどか
4) 子宮頸癌手術後の放射線治療の役割．癌の臨　37(14)：1679-1685(1991)喜多みどり，大川智彦，田中真喜子，兼安祐子，唐澤久美子，磯部まどか，吉川香澄
5) 癌・放射線治療up date—術中照射法の現状．Karkinos　5(4)：413-419(1992)喜多みどり，大川智彦，田中真喜子，兼安祐子，唐澤久美子
6) 乳房温存療法における乳房照射法の実際．乳癌の臨　7(2)：200-208(1992)喜多みどり，大川智彦，唐澤久美子，兼安祐子，田中真喜子，平林久枝
7) 癌・放射線治療におけるインフォームド・コンセント．癌治療と宿主　5(2)：164-168(1993)大川智彦，喜多みどり，田中真喜子，兼安祐子，唐澤久美子，丸山市郎
8) 悪性腫瘍における癌遺伝子(c-myc)の測定とDNAヒストグラムの解析．癌と化療　20(6)：834-838(1993)喜多みどり，大川智彦，長谷川直美，丸山市郎，唐澤久美子，兼安祐子，田中真喜子
9) 乳癌治療における放射線の現状と未来—骨転移に対する放射線治療の寄与—とくに半身照射について—．乳癌の臨　8(3)：349-356(1993)喜多みどり，大川智彦，唐澤久美子，兼安祐子，田中真喜子
10) 乳房温存療法（BCT）放射線療法の役割．カレントテラピー　11(2)：13-17(1993)大川智彦，喜多みどり，田中真喜子，兼安祐子，唐澤久美子，丸山市郎